



TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集 コミュニケーションを支える文法

巻頭エッセイ

学校で教えてもらえないこと 國重友美 01

特集

コミュニケーションを支えるのは教師：From Recitation to Dialogue 今井裕之 02

入門期の文法指導 溪内 明 06

関係代名詞の指導 原田尚孝 08

コミュニケーション型文法のテスト 重松 靖 10

連載

英語教師のための基礎講座 教師の役割再考 高橋貞雄 12

評価クリニック 教科書の言語活動に合わせたテストを 根岸雅史 14

授業レポート 本文の読解から自己表現へ(2) — 音読指導の工夫 — 立川研一 16

小学校英語 Just Now

長野県の小学校英語の状況 — 長野市、小諸市と佐久市浅科での指導を通して — ... 渡邊時夫 19

単語の文化的意味 74 black 森住 衛 21

Essay The "True" Meaning of "Auld Lang Syne (蛍の光)" Robin Sakamoto 22

英語教師のリソース

英語で言いたかったけれど言えなかった表現を探る
— EasyKWIC 2を活用しよう! — 日墓滋之 23

AROUND THE WORLD フランス：ことばと文化[3] 町田 健 表紙裏

表紙写真について イングランドのカントリーホテル 松沢伸二 表紙裏

Vol.17

**SPRING 2010
SANSEIDO**

文化と世界

ラシーヌ、モリエール、バルザック、ベルレーヌなど、フランス文学の歴史を作り上げた作家たちは、日本でもよく知られています。ミレーやロートレックなどの画家、ビゼーやベルリオーズなどの音楽家も、世界の芸術家たちに大きな影響を与えています。芸術の分野では、イタリア、ドイツとともに、フランスは世界に君臨する国家だと言えるでしょう。

芸術だけでなく、哲学者のデカルト、数学者のラグランジュやコーシーなど、学問の分野でもフランスは偉大な学者を輩出しています。私たちの誰もが子供の頃に伝記を読んだキュリー夫人も、生まれはポーランドですが、フランスで行った研究でノーベル賞を2回も受賞したのです。フランス本国ではあまり知られていないようですが、『昆虫記』の作者ファーブルは、南フランスで昆虫の観察を地道に続けた人でした。

これほど数多くの第一級の学者や芸術家がフランスで活躍できた背景には、フランスが近代初期にいち早く統一国家を築いて、世界各地で植民地を経営し、莫大な富を手にしたことがあるのだらうと思います。芸術や学問が発達するには、社会に余裕がなければなりません。富を蓄積することで、近代国家フランスにはその余裕が醸成されていたのです。

もちろん、お金があっても、文化を享受する風土がなければ、学芸の稔りは得られません。ゴチックやロ

マネスク様式の教会に見られるような、美を追求する志向、パリ大学を中心として行われたキリスト教神学研究のような、精密な論理を基礎とする思想、南フランスに発生し、北にも伝搬することになった、恋愛を華麗に歌い上げる叙情詩など、近代以前のフランスには、近代の学芸を予想させる優れた知性と感性の活動が行われていました。近代以前にすでにこのような風土があったからこそ、国力をつけたフランスに学芸の花が開いたのだと考えることができるでしょう。

18世紀終盤に起きたフランス革命以前は、上流階級だけが、文化的活動に携わることができました。ただ、革命以降も、事情はそれほど変わっていません。革命の成果を制度化したナポレオンは、ほんの一握りのエリートだけが入学できる上級学校をいくつか作りました。フランスの知的活動だけでなく、経済や政治の中核を担ってきたのは、これらの学校の卒業生が中心です。現代の日本で暮らす人間からすると、なかなか想像がしにくいのですが、フランスという国は、法律的にはともかく、現実としては、古い階級制度が残されたままの社会だと言えます。エリートのみ許された、高いレベルの学問と芸術。これが長い間世界を指導する地位にあったことは確かです。もしそうでなければ、フランス文化がどうなっていたのかは分かりません。この善し悪しはともかくとして、世界はフランス文化に魅了され続けています。

表紙写真
について

イングランドのカントリーホテル

松沢伸二 Matsuzawa Shinji (新潟大学教育学部)



Jack: Where would we stay?
Joy: I don't know. Small country hotel?

これは、映画“Shadowlands”(1993)でのやりとりです。JackとJoyは熟年結婚して、新婚旅行先にEngland西部のGolden Valleyを選びますが、その宿泊先についての会話です。私は、この映画でカントリーホテルの存在を知りました。

表紙写真は、妻と英国を旅したときに泊まったHolne Chase Hotelというカントリーホテルです。映画

のホテルは木骨が見えるhalf-timber様式でしたが、私たちののは白しゅくいの建物でした。しかし、田舎の静かなところにある点は同じです。

Londonから西にドライブすると、アガサ・クリスティーの小説で知られる海岸保養地のTorquayに着きます。ホテルはそこから内陸に入ったAshburtonの奥にありました。

11世紀、この地に修道院長のための狩猟小屋が建てられました。それがこのホテルの起源ですが、現在は、人々が都会の喧噪を逃れてくつ

ろぐ隠れ家(hideaway)になっています。

オークの巨木などに囲まれたホテル前の窪地を歩いていくと、Dart川沿いの散歩道に着きます。そこで会った宿泊客の男性は、「Londonは騒がしい。ここには本当の静けさがある」と語りました。

ホテルは地元Devonの食材を料理します。私達はディナーをおいしくいただき、疲れを癒し、翌日はゴールズワージーの“The Apple Tree”(1916)の舞台となったDartmoorに向けて、ホテルをあとにしました。



学校で教えてもらえないこと

國重友美 Kunishige Tomomi

私の英漢字（ええかんじ）書家としての道のりはわからないことだらけだ。

小さい頃から書で食べていきたいと漠然と思っていたが、どうして転校して書道教室が変わるたびにまた9級から始まるのか、書道家と書家の違いが何なのか、どうやったら書家になれるのか、などがわからなかった。

書道には会派といったものがあってそれぞれの会派で段位を取得しても全国共通ではない。それがわかってからは大学に進学し、書道の教員免許を取得しようと思った。そこでもまた国語科の教員免許も取得していないと採用が難しいといった現実があった。美術や音楽には他の教科の教員免許を持っていた方が有利などということはないのに、どうして書道には必要なのだろうか？ 大学を選択するときも、国立大の教育学部だと書道の教員免許しか取得できなくて私立だと同じ4年間で国語科の教員免許も取得できる。どうして国立大でも同じように取得できないのだろうか、小学校、中学校の書道科の先生はいないのにどうして免許もない先生が教えられるのか、などといったいろいろとわからない壁にぶつかった。今回は「英漢字書家」になってから最初に学んだ「学校で教えてもらえないこと」のお話をしたい。

英漢字の作品集を出した出版社にメールがきた。それはある学校の書道の先生からで、「とても面白い書だと思ったのでコピーをして生徒に臨書（お手本を見て書くこと）させました」という内容だった。とても嬉しいことだけど私はとても恐ろしくなった。ふと自分が教育実習のときにこの先生と同じように当たり前のように本をコピーして生徒に配っていたことを思い出した。

私も英漢字をひらめくまでは全く意識もしなかつ

たが、特許庁に電話したり、著作権や、知的財産といったものを1年間独学で学びやっと商標登録ができたという経験を経て、どうして知的財産について学校の授業でちゃんと教えてもらうことはないのだろうかと疑問を抱いた。学校で教えてもらわないのに社会に出ると「当たり前でしょ！ 知らないほうが悪い」となる。これでは生徒がかわいそうだ。

以前に漫画家の方たちが著作権の問題で集団訴訟をされた事件があったり、最近では中国の偽ディズニーランドといった問題がメディアに大きく取り上げられたりと、世界的に見ても知的財産についての裁判は日常的に行われている。

私も以前にあるイラストレーターの方が大手の企業のカレンダーとして「ええかんじカレンダー」というタイトルで出版されていて、その時の私の所属事務所とその会社の顧問弁護士とで話し合いになったことがあった。大きく問題になる前にカレンダーは回収されて裁判にはならなかった。また私の作品を購入されたお客様がその作品をデータで取り込んでお店のロゴにしたいと言われたこともあった。知らないということは本当に恐ろしいことだと思った。しかし世の中に出ると知りませんでしたはずまないこともあるのだ。

文明が発達しパソコンでさまざまなことができるようになると知的財産権に対する意識が本当に大切になってくる。教育現場の最前線である先生方には、その機会が多いだけに、より意識し、さらに子どもたちにも伝えていってもらいたい、と願います。

くにしげ ともみ 英漢字[®]書家

英語でも漢字でも同じ意味になる新感覚アート「英漢字」を発案。選りすぐりの作品を集めた英漢字作品集『御祝』（TOKIMEKI パブリッシング）が好評発売中。

コミュニケーションを支えるのは教師： From Recitation to Dialogue

今井裕之

(兵庫教育大学)

1. What color do you like?

ある小中の教員による研究会で、小学校英語について議論した際に、「小学校で What color do you like? と尋ねあう活動をする意図は何でしょうか?」という問いが出されました。当初は質問の意図を共有することに苦労しながらも、この問いに端を発した議論はとても有意義なものになりました。

加藤京子先生（兵庫県三木市立緑が丘中学校）が「好きな色を尋ねあうにしても、セーターの形のカードを使うときと、車の形のカードを使うときでは、何色が好きかは変わってくる。中学校では、携帯電話の色の好みなどを話すと盛り上がる」という主旨の発言をされました。「折り紙の活動をする際には、好きな色を尋ねあう必要がある」という小学校の先生の発言も印象に残りました。どちらの提案も、英語が、学習対象というよりも生徒や児童の生活を語る言語として位置づけられていることが印象的でした。言われてみれば、自分も車や携帯電話は白ですが、白いセーターは着ません。

2. コミュニケーション教育と英語教育

小学校外国語活動に、red, blue, yellow という色の名前を定着させるような、言語に軸足を置いた教育と、クラスの友達をよりよく知ろうとするような、コミュニケーションの教育の2つの形があるとしたら、前者は、飽きさせないよう工夫をしながら表現を繰り返させること、後者は、互いに興味関心を抱き、対話が続くよう働きかけることが、それぞれの教育目標となるでしょう。

小学校外国語活動の授業には、このような英語教育的なもの、コミュニケーション教育的なもの、さ

らに国際理解教育的なものの3種類があるように思います。コミュニケーション教育を核にした実践では、英語もさることながら、どのように自分のターンをとり、他者にターンをゆだねるかが大切な学習課題となります。他者のことばに自分のことばをつないでゆく方法を学び、一方で、英語の力不足を補うために絵や道具やジェスチャーなどをコミュニケーションのリソースとして活用することも学びます。何よりコミュニケーション活動を通して、他者を肯定的に受け入れ、自らを他者の解釈にゆだねることの大切さと難しさを体験的に学びます。このようなコミュニケーション力を獲得するには、やはりコミュニケーション教育そのものが必要です。

英語教師は英語を教えることが本職であり、コミュニケーションを教えることは、本来別の教育なのだから自分の仕事ではないと切り離してしまう議論もできるかもしれません。しかし、各々に実践方法が異なる2つの教育を、今回の特集タイトルである「コミュニケーションを支える文法」のあり方を考え、重ねあわせようとすることも、私たちの仕事なのだと考えることもできるでしょう。前述の加藤先生のお話のような、「ことばを選びとって使う実感」を通してことばの形式と意味と使われ方を学ぶ活動に、その可能性を探してみたいと思います。

3. 文法知識の「習得」と「活用」

文法や語彙の知識を身につけ（習得）、身につけたことを用いて自らの思考や判断を表現すること（活用）が、今回の『学習指導要領』の改訂にあたり、教科を問わず強調されるようになりました。「習得・活用・探究」という三者の関係で議論されることが多い概念ですが、これらのうちの特に「習得」と「活

用]の関係を具体的に考えることで、「コミュニケーションを支える文法」にアプローチしてみましょう。

「習得」の対象は知識や技能です。「活用」は、その知識や技能を用いて考えを深め、表現することだとされています。そうすると、「習得した知識を活用して思考・表現する」という一方向的な学習過程が思い浮かびますが、必ずしもそれだけではなく、「活用を通して習得した知識の理解が深まる」という点で、双方向的、相互作用しあう関係であるとも指摘されています。ここでは、習得の対象となる知識を文法とみなし、活用の目的となる思考・表現をコミュニケーション活動とみなして、具体的に分析してみましょう。

4. NEW CROWN を使った言語活動と習得、活用

NEW CROWN には、CHECK IT, USE IT (THINK ABOUT IT), DO IT (TRY) などの言語活動があり、文法指導からコミュニケーション活動へつながる枠組みを構成しています。当然ながら、「どれが習得で、どこからが活用なのか？」という疑問が浮かび上がると思います。徹頭徹尾すべて「習得」である！と考える先生もいらっしゃるかもしれませんが、THINK ABOUT IT と TRY だけが「活用」らしい思考活動だという説、USE IT と DO IT の間が境界線という説もあるかもしれません。

授業は、先生と生徒の構えしだいでいかようにも変化するので、どの説も正しいと思いますが、私の想像の及ぶ範囲では、CHECK IT は、やはり習得のための活動です。それ以外の活動は、指導方法しだいで活用の活動になり、穏当な区分をすると以下のようになると思います。

習得的活動	中間的	活用的活動
CHECK IT	USE IT, DO IT	THINK ABOUT IT, TRY

表1 NEW CROWN の言語活動の分類

substitution drill として使うことも可能な CHECK IT は、習得のための練習に適しています。USE IT は、活動の幅が広く、知識や技能の定着(習得)をねらったものから、発話者が伝えたい意味を状況に即して言ったり書いたりするものまでありま

す。例えば、3年生 USE IT 6-1 (図1) では、英語を聞いて、どの動物の説明かを答えます。



図1 習得に近い USE IT の例：どの動物かな？

知識や技能を用いて思考するのが活用だとすると、この活動では、聞き手の思考や判断が求められてはいますが、CHECK IT の「聞いてみよう」に似たものであり、関係代名詞の活動ゆえ、理解の段階にとどめる意図が見えます。This is an animal that is very small. It is very busy before winter. What is it? (Answer: An ant.) といったクイズ形式のリスニングですので、より思考や判断を促すためには、先生や生徒自身がクイズを考えてもよいでしょうし、指定されたものをおもしろおかしく定義する definition game などをすれば、より発話者の意味の込められた活用になるでしょう。

実際の使用場面では誤用が多いといわれる want 人 to ~ に関する 3年生 USE IT 7-1 (図2) は、島田先生の指示に従い、日本語が苦手な留学生にキャンプのスケジュールを英語で説明するという活動です。

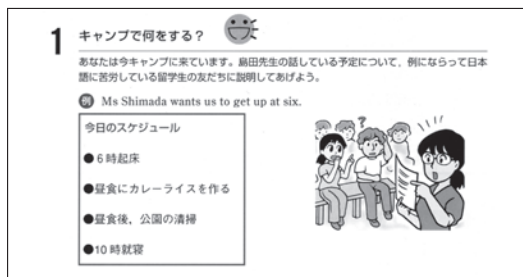


図2 活用に近い USE IT の例：キャンプで何をします？

その日のスケジュールは日本語でリストアップしてあり、島田先生も日本語で指示するという設定で、生徒は Ms Shimada wants us to clean the park after lunch. といった具合に、英語にして相手に伝える練習です。場面、状況設定が詳細で現実的という点では、この USE IT を活用の言語活動に用いることができると考えられます。ただ、Ms

Shimada wants us to ～.と表現したくなるような、生徒たちがあまり気乗りしない内容や状況を多く設定するのは難しいので、どの問いもすべて want 人 to ～を使わせるのではなく、一部には自分を主語にした表現 We will cook rice and curry for lunch! など、楽しみな内容と対比させるなどの工夫をすることで、より活用らしい活動になるかもしれません。

DO IT は習得と活用の両方が段階的に構成され、TRY は活用にあたる言語活動になっています。2年生の DO IT WRITE 1 では、STEP 1 で、モデルスピーチが提示され、STEP 2 で、モデル文を改作して自分らしい文をつくり、TRY で、自分の将来についてのスピーチにまとめて発表する構成になっており、習得→活用の流れで言語活動が進みます。2年生の活用型の活動の中ではハイライトのひとつではないでしょうか。

CHECK IT から DO IT へと流れる NEW CROWN の言語活動の配列や、DO IT 内の活動配列などから、おおむね「習得」→「活用」へ進むようにデザインされていることが分かります。これは他の多くの教科書にも共通して言えることだと思います。整然とした理解から思考、表現へのプロセスを設けることが、英語教育の観点からは大切であることはいまでもありません。しかし、コミュニケーション教育の観点からこれらの言語活動を見ると、どうでしょうか。冒頭のエピソードにあった、What color do you like? と、互いの好みを聞きあうような活動に見られる、1人称同士のやりとりによる相互理解、受容されている実感、自己肯定感を持つような活動などの視点から見たときに、教科書の言語活動がカバーしきれない部分を、教室で先生と生徒たちで補ってほしいと思うことがあります。

5. 英語授業研究から見えること

教科書の言語活動には、生徒同士の交流を促す活動や、共同で行うプロジェクト的な活動もありますが、多くは文法の定着を念頭に繰り返し聞いたり、言ったり、書いたりする活動で占められています。繰り返し同じ構造の文を聞いたり書いたりすることを少しでも自然にするために、Akira, Mary, Ms

Shimada と、人物が入れ替わり立ち替わり登場して、本を読んだり、テニスをしたりします。このような架空の3人称が繰り広げる世界に身をゆだねてコミュニケーションをする気持ちにはならないでしょうし、そのような言語活動だけでは、教室で学びあう互いの理解や関係が発展することは難しいでしょう。文法指導がコミュニケーションに結びつかないのは、文法指導がコミュニケーション「能力」を育てられないというよりも、英語授業の場における、コミュニケーション教育が乏しいのではないのでしょうか。

小学校から中・高等学校の英語授業を観察研究していると、学年が上がるにつれ、コミュニケーション活動、コミュニケーション教育の相対的な割合がどんどん減っていくことが実感できます。特に高校1年生あたりからの減少が顕著のように思います。その理由のひとつが、学習対象となる言語材料の著しい増加であることはいまでもありませんが、それだけでもないように思います。

大雑把すぎるとお叱りをうけるかもしれませんが、英語の授業で私たちは、2つのことをしているように思います。1つは「他者とことば・声を合わせること」です。他者には教科書の文章も含まれます。小学校からの入門期に、歌やチャンツや絵本を使うのは、良質のモデルになることばや教室の友だちの声と、自分のことば・声を同調させているのだと思います。授業研究の用語で recitation と呼ばれる行為です。スピーチや教科書本文を暗唱することだけを指すのではなく、先生の質問に対して、期待される答えで応じることも recitation です。

Teacher: What's the date today?

Students: It's November 16th.

Teacher: Good.

このようなやりとりが、小学校から高等学校、大学まで頻繁に見られます。英語の形式と意味を結びつけて覚えること、日本語訳と対照して英語を思い出せることは、英語教育の観点から大切であり、モデルとなる正しい英語に自分の英語を合わせる recitation が学習方略の上からも効率がよいと言えます。

もう1つしていることは「ことば・声をつなげる

こと」です。会話ばかりでなく、テキストを読んで自分の感想を述べるのも、ことばをつなぐことになります。授業研究の用語では dialogue と呼びます。dialogue は、他者のことばを受け止めたり、相手に自分のことばの解釈をゆだねたりすることです。不安と期待とが入り交じる、他者のことばとの出会いの活動です。小学校の外国語活動では、授業の最後にしばしば「振り返りカード」を書いて、その日の学びを言語化します。低学年での歌を中心にした recitation 活動の振り返りには、「楽しかった」ということばが頻繁に出てきます。一方、中・高学年で、インタビューなどの対話活動を含む dialogue 活動をしたあとの振り返りには、「どきどきした」という表現が見られます。この「どきどき」は、伝わらないかもしれない、受け止められないかもしれない不安感が、成功体験を通して解消され、ほっとしたときの実感を表すことばとして解釈することができます。コミュニケーション教育の授業には、このようなどきどき感が欠かせないのだと思います。

6. コミュニケーションを支える文法指導

文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえるようにとの新『学習指導要領』の文言は重要だと思います。言語形式の意味とともに事例を示しながら用法を説明すること、例えば Is there a good restaurant in your town? と尋ねられるのと、Are there ~? と複数形で尋ねられるのと、町の住人としてどちらが気分がよいかといった問いを生徒に投げかけるのは大切なことだと思います。

それに比べて、セーターなら茶色が好きだけれど、携帯は絶対白！ ということを英語で話すことの大切さは、「コミュニケーションを支える文法指導」としての意義が薄いと感じられるかもしれません。しかし、吉田 (2008) による、現在完了の使用の正確さを比べた研究から、発話者個人の意味を込めた文で練習をしたグループが、与えられた文で練習したグループに比べて、正確さ自体は大差なかったものの、完了形の使い過ぎ (overuse) による間違いが少ないという結果が得られました。また、データが

あるわけではありませんが、充実した小学校外国語活動の実践を行っている学区の中学校の先生が「小学校英語をやるようになって、会話活動をするときに、A-B-A で終わっていたターンが、もう一往復増えて A-B-A-B-A まで続くようになった」とおっしゃっていました。外国語活動以外の授業ではほとんど発言しない児童が、英語では発言するので驚いたという声も聞いています。

「習得」でことば・声を合わせる recitation を保証しつつも、「活用」でことば・声をつなげる dialogue の活動、発話者個人の意味を教室の活動に持ち込むことは、文法指導の上でも、コミュニケーション力育成の上でもカギになるように思います。

7. コミュニケーションを支える教師

生徒の思考を促す「活用」(dialogue) を教室に持ち込むには、授業準備をする教師にとって負担になる面もあると思います。ただ語彙、文法、構文の定着を図るだけが教育目標であれば、生徒に学ばせる (recitation させる) 英文を提示できさえすればよいこととなります。モデル文の提示を行ったり、本文に書かれている事実を忠実に再現したりするための Q&A などをすればよいわけです。

しかし、今回議論したように、学習者の思考や判断を表現しあうコミュニケーション教育をしようとする場合、教師の役割は、モデルの提示役から、生徒の発言を引き出す (elicit) 役へと、発想を転換しなくてはなりません。教師がよく使う “Good.” という評価発話は、対話を終わらせてしまいます。教室の対話者とことば・声をつなげる力が教師に求められています。このことは、話しことばだけでなく、書きことばでも同様です。田中、田中 (2009) は、リーディング活動の中で、生徒の思考、表現を引き出すための発問について議論しており、参考になるのではと思います。

【参考文献】

- 田中武夫、田中知聡 (2009) 『英語教師のための発問テクニック—英語授業を活性化するリーディング指導』大修館書店
 吉田勝雄 (2008) *Effects of Self-expression Activities on the Learning of the Present Perfect: A Cognitive and Affective Perspective*. 兵庫教育大学修士論文

入門期の文法指導

溪内 明

(東京都足立区立第十中学校)

1. 入門期指導の変化と役割

この数年の間で、入門期(中学1年の4月～5月上旬頃、教科書本課に入る前の時期)の指導方法、内容が変化している。小学校で英語活動を経験して中学校に入学した生徒は、既にあいさつや自己紹介ができる。食べ物、動物、スポーツ等の語彙を知っていて、発音することができる。I like soccer. と自分の好みを言うことができる。Do you have a sister? などの簡単な質問に、Yes. / No. で答える生徒も珍しくない。新しい『学習指導要領』にある通り、小学校で「音声や基本的な表現に慣れ親しんで」入学してくる。

数年前には、4月の最初の授業で教師が英語を話す時、驚きの表情を見せる生徒が多くいた。小学校で英語活動を経験した今、それを新鮮と感じる生徒は少ない。

中学校の入門期指導の内容は、それに対応して変化してきている。小学校で親しんだ音声と語彙を十分に生かし、文字を導入する前から、本課で扱われる言語材料を見通しながら、文をしっかりとらせるようにしている。私はこれを最初の文法指導と位置づけている。

2. 入門期指導の3つの柱

私の授業では、入門期の指導に(1)語彙(2)文法・表現(3)文字の3つの柱があり、4月～5月上旬にかけて、原則として1時間の授業の中で、3つを平行して指導する。

(1) 語彙の指導においては、身近にあるもの、教室の中にあるもの、自分の持ち物、食べ物、動物、スポーツ、家族、身体の部分、色、形、基数、序数、

教科の名前、曜日・月・天気などの単語を、絵や実物を使って導入し、発音できるように指導する。小学校での学習経験を生かすようにしている。(2) 文法・表現の指導については、次の項で詳しく説明する。(3) 文字指導では、アルファベットを発音して書く練習まで行う。Lesson 1 開始前には、Let's Start で扱われる単語を書けるようにする。

3. 入門期の文法指導

入門期の文法指導では、前節で紹介したカテゴリーの語彙を活用しながら、該当する文法事項を音声で導入し、口頭練習を行う。文単位で発話することを徹底的に教え込まれるのは、小学校の英語活動では経験しなかった部分であり、「英語の授業は英語で行う」という教師の姿勢を示す場でもある。日本語による文法説明は一切行わず、全て、教師と生徒で、または生徒同士で音声のやりとりを重ねることで、英語の文に慣れさせることが目的である。

扱う文法項目は以下の通りである。教科書(NEW CROWN BOOK 1)のLesson 1～4あたりで扱う文法事項も意識している。この時点で、前もって触れておけば、教科書本課で学習する際に、大いに理解の助けになる。

【入門期で扱う文法事項】

- ① I / you
- ② I am Ken. / You are Emi.
- ③ Your pen? Yes. My pen. [No. Not my pen.] / Whose pen? Kumi's pen.
- ④ This is my book. / That is your book.
- ⑤ My favorite food is sushi. / Your favorite food is *udon*.
- ⑥ What is —'s favorite color?

His [Her] favorite color is white.

⑦ Who is this girl?

She is Sazae-san. She is Tarao's mother. They are good family.

⑧ I have two brothers. / You have a sister.

⑨ This is my cup. / These are my cups.
/ That is your box. / Those are your boxes.

⑩ What time is it? It's 10:30. / One plus three is four.

⑪ When is your birthday? My birthday is January 11th.

4. 入門期の文法指導の例

(1) my / your の導入

my / your は、持ち物を表す語を学習したあとで、次のように導入している。

T : (袋の中から持ち物を取り出し) What is this?

Ss : Pen.

T : Yes. (自分を指して指しながら) My pen.

T : What is this?

Ss : Triangle.

T : Yes. My triangle.

(さらに2, 3の持ち物を同様に話題にする。)

T : (1人の生徒に近づき) What is this?

S1 : Eraser.

T : Yes. (生徒を指しながら) Your eraser. What is this?

S2 : Ruler.

T : Yes. (生徒を指して) Your ruler. (教師が自分の定規を出して) My ruler.

(さらに3名の生徒と同様のやりとりをする。)

T : (教師が自分の消しゴムを取り出し) My eraser.

(生徒の消しゴムを指して、同じことを言うように促す。)

S3 : My eraser

T : Good. Your eraser.

(さらに同じやりとりをくり返し、my / yourの意味を理解させる。)

(2) his / her の導入

his / her は、色の名前を学習したあとで次のように導入している。

T : You can see many colors on the board. What is your favorite color?

Ss :

T : My favorite color is blue. I like blue.

(I like ~. は小学校の英語活動で学習している場合が多い。)

What is your favorite color?

S1 : Green.

T : Good. Your favorite color is green. What is your favorite color?

(さらに数名と同じやりとりをして、4人目くらいから、徐々に文を言わせて練習させる。)

S2 : My favorite color is white.

T : Good. What is S2's favorite color?

S3 : White.

T : Yes. His favorite color is white.

(さらに同様のやりとりを行い、his / herを聞かせる時、徐々にhis / herの区別が理解できてくる。4人目くらいから、徐々に文を言わせて練習させる。)

T : What is S4's favorite color?

S5 :

T : His? Her?

Ss : Her!

T : Yes. Her favorite color is yellow.

S5 : Her favorite color is yellow.

数名と同じやりとりを行い、自力で言えるようにする。

5. 最後に

入門期の文法指導では、文字を提示しないで文法(文型)を導入するので、分かりやすい状況を設定して、十分に語句や文を聞かせている。そのあとで徐々に口頭練習を行う。(これは、本課に入ってから文法指導にも共通していえることである。)また、毎回の授業で既習事項の振り返りを行い、新しい文(文法事項)をプラスして提示するようにしている。スパイラルに文を増やすことで、生徒は、言えることが増えていくと実感できる。また、授業の最後に「今日はどんなことが言えるようになったか」を日本語で書かせて、家庭でも振り返りができるようにしている。

関係代名詞の指導

原田尚孝

(熊本県熊本市立京陵中学校)

1. はじめに

平成20年3月に公示された新『学習指導要領』には、文法とコミュニケーションの関係について、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」という記述がある。本稿では、「習得」、「定着」、「活用」の流れを意識した関係代名詞の指導実践を紹介し、言語活動と関連付けた文法指導を考えていきたい。

2. 習得 (導入)

関係代名詞の導入については、生徒が後置修飾という構造を理解しやすいように以下の2つの方法を併用している。

(1) 既習文と比較する

既習文の2つをつなぐことにより、関係代名詞が接続詞と代名詞の働きをすることを理解させる。

I have a friend. And he lives in Australia.

I have a friend who lives in Australia.

(2) 気づきを与える

先行詞のあとに関係代名詞を用いて情報をつけ加えていく形を、生徒に数例提示する。そして、(名詞)句としてひとつのまとまりになっていることに気づかせる。

the book

the book which Tom read last night

次に、それが文の中で補語や目的語、そして主語などの役割を果たすことを理解させる。

This is the book which Tom read last night.

(補語)

I know the book which Tom read last night.

(目的語)

The book which I read last night is interesting. (主語)

3. 定着 (Practice)

定着については、既習語や生徒に興味のある単語を使ったり、活動にゲーム的要素を取り入れたりするなど、生徒の意欲を保つ工夫が必要である。

(1) Pair Work

関係代名詞は単語の定義によく用いられる。そこで、Information Gap Activity のペア活動を通して、関係代名詞 that (主格) の定着を図る。

STUDENT A

1.calendar 2.rain 3.dictionary 4.ferry

STUDENT B

A water that comes from the sky

I a book that tells you the meanings of word

ウ a boat that takes people across the sea or river

エ a piece of paper that shows us the days, weeks, and months of the year

この活動においては、Information Gap を作り出すことで、ペアで協力し、よりコミュニケーションに文法事項の定着が図られる。

(2) 「クイズ」発表

ここでは、生徒が実際に自分で関係代名詞を含んだ英文を作り、クイズ形式で活動させることにより、更なる定着を図る。手順は以下の通りである。

- ① 自分たちで作った関係代名詞を含むクイズをグループ内で確認しあい、必要があれば修正する。

- ② 各グループで問題の配列(易から難)を考える。
- ③ 各グループで、全体発表のための準備(司会、質問者等の役割分担決定)をする。
- ④ くじで発表班を決め、みんなの前で質問する。他の生徒はよく聞いて答えを考え、シートに記入する。その後、答え合わせを行う。

以下に生徒の作品例を示す。()内は正解例

【人+主格(who)】

- ・ a person who teaches English to us (Mr Harada)
- ・ a person who built Tosyodaiji Temple (Ganjin)
- ・ a man who walked by himself to make a Japanese map (Ino Tadataka)
- ・ a beautiful woman who ate a poisoned apple (Snow White)

【物+主格(which)】

- ・ something which is in our body and always beating for us to live (heart)
- ・ something which is opened by people when it's raining (umbrella)
- ・ a kind of book which has many pictures of your memories (album)

【物+目的格(that)】

- ・ yellow foods that you can buy at a fruit shop (lemon, banana)
- ・ 52 small sheets of paper that you can use to play many games (cards)

4. 活用(発展)

関係代名詞の発展的な活動としては、生徒全員に Show and Tell を行わせることにした。その中で、次の3点に留意しながら指導を行った。

- ① 初歩的な英語を用いて活動するにしても、発表内容は生徒の知的レベルや好奇心に応じたものにする。これにより聞き手も興味を持って発表を聞くことができる。
- ② 発表原稿には、関係代名詞を含む文(This is ... who / which / that ~.) を必ず1文以上入れる。これは、物を見せながら説明するときの手助けとなる。
- ③ 今回の活動のねらいは Show and Tell の発表はもちろんのこと、発表後の QA 活動にもある。聞き手は、発表内容を聞いて、質問を考えなければならないし、発表者もその場で質問に答えなければならない。まさに今まで学習した知識

を総動員して行うコミュニケーション活動であると言える。

【Show & Tell (My Memory) の例】

- ・ 見せるもの：寄せ書き
- ・ 伝えたいこと：部活の思い出

Hello, everyone! Today I'm going to talk about my memory. This is a picture which I got from the second year students of the volleyball club. It looks like only a picture, but it is a yosegaki and also it is a jigsaw puzzle. There are wonderful words on the picture. I think about how happy I was in the volleyball club. It is a treasure that is full of my memories. Thank you for listening.

【QA 活動の例】

司会：Do you have any questions?

S1：Do you like volleyball?

発表者：Yes, I do.

S2：Will you play volleyball in high school?

発表者：Maybe, yes.

S3：Why do you play volleyball?

発表者：Because volleyball is a lot of fun.

司会：Thank you very much.

5 まとめ

『学習指導要領解説』の中には、「文法事項を指導する際には、その意味や機能を十分に理解させた上で、それまでに学んだ語彙や文法事項と関連を図り、言語活動の中で自分の考えや気持ち、事実などを伝え合うことに生かすことが大切である」とある。

関係代名詞を単なる文法事項としてではなく、コミュニケーションを支えるものとしてとらえ、指導場面の工夫を行い、生徒の自己表現能力を伸ばしていくことはとても大切である。そこには「楽しく力をつける」というねらいもある。今後もコミュニケーションを支える文法指導の在り方を模索していきたい。

【参考文献】

英語教科研究会(編)『スーパー・ペアワーク3年』正進社

コミュニケーションを支える文法

コミュニカティブな文法のテスト

重松 靖

(東京都国分寺市立第三中学校)

1. はじめに

「文法とは？」と問われて咄嗟に答えることができないのは私だけだろうか。ODE で調べてみると，“syntax”，“morphology”，“phonology”，“semantics”など、学生時代に言語学の講義で耳にした用語で説明されている。つまり、『学習指導要領』で示されている「言語材料」、すなわち、「音声」「文字及び符号」「語、連語及び慣用表現」「文法事項」と解釈してよいようだ。しかし、「音声」や「文字及び符号」は、それだけを取り出して指導したり、テストしたりすることは少ない。本稿では、「語、連語及び慣用表現」「文法事項」に絞って考えてみたい。

2. 何をテストするのか

“Excuse me.”や“You’re welcome.”などの表現は、場面に応じて適切に使えればよいものであり、中学の段階では読めたり、書けたりできなくても構わない。一方，“Sincerely.”や“Please write me soon.”など、手紙で用いられる語彙や表現はきちんと読め、書けるようになってほしい。

文法事項についても、例えば三単現のsを落としたとしても情報の伝達という意味では支障はないが、“This is an animal.”と伝えたいのに、“This animal is.”と言ったのでは相手は困惑するだけである。

後置修飾を含め、「語順」と「時制」は日本語と英語では大きく異なり、生徒にとってはやっかいなものである。しかし、これらを誤ると正しく意味を伝えることは難しくなる。ていねいに繰り返し指導するとともに、適切に評価することが大切である。

このように、「語彙」や「文法事項」はその意味や

働きに応じ、どこまで指導し、どのようにテストしたらよいかを十分に吟味する必要がある。生徒に余計な負担や混乱を与えてはならない。

3. どのように評価するのか

(ア) テスティングポイントを明確に示す

テストは、指導者にとって、指導した内容の定着度を知り、以後の指導に生かすためのもの、生徒にとっては、学習した内容の理解度を知り、以後の学習に生かすためのものでなければならない。そのためには、大問ごとに何を測ろうとしているかというテストポイントを明確に示す必要がある。テストポイントも、【文法：現在完了の意味】などと、できるだけ具体的にすべきである。

(イ) 場面を明示する

文法のテストをよりコミュニカティブにするためには、提示する英文がどういう場面で使われているのかを示し、コミュニケーションを意識させる必要がある。東京都中学校英語教育研究会のコミュニケーションテストにおける語彙問題が、「ある場面において、適切な語彙の運用ができるか」を目的にしているのもこのためである。

例えば、疑問詞“what”という語彙をテストしたいとする。最も簡単な方法は、「次の日本語を英語に直しなさい」等である。しかし、これでは、誰がどういう場面で発するのが分からない。

1つの方法としては、対話文にすることである。そうすることで、contextが明らかになり、場面をイメージできるようになる。ただし、テストポイントは、【語彙：“what”】なので、readingの要素をできるだけ排除するため、対話をワンターンとし、英文も平易にする必要がある。

【例1】

次の英文の()に入る語として最も適するものを①～④の中から選び、番号で答えなさい。

A: Nancy, can I ask you a question?

B: Sure. () is it?

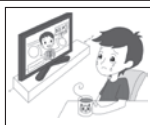
- ① How ② When ③ What ④ Who

(平成21年度東京都都中英研「コミュニケーションテスト」より)

イラストを用いることも効果的である。

【例2】

次の絵を説明する英文になるよう()に適する語を入れなさい。



My brother watched the news on TV last night. It made him ().

- ① happy ② sad ③ angry ④ sleepy

(平成21年度東京都都中英研「コミュニケーションテスト」より改題)

(ウ)形式よりも意味

- ・ 同じ内容になるよう適語を入れよ。
 { He is so young that he can't drive a car.
 { He is () young () drive a car.
- ・ 次の()内の語を適する形に直せ。
 The bus has just (leave).

これらは、多くの人が一度は目にしたことがある問題ではないだろうか。「ルール」さえ知っていれば、so / that / can't や has just が目に入った途端に too ~ to ..., 過去分詞 left が頭に浮かぶ。「誰が何をした」など、英文の意味は関係ない。コミュニケーションとは無縁の、言語の形式や機械的な操作の問題である。「ルール」を覚えることも必要ではあるが、コミュニケーション的な文法のテストでは、言語の形式が持つ「意味」をテストすべきである。例えば、現在完了形の次の問題を見てみよう。

【例3】

絵の吹き出しに入る英文として最も適するものを①～④の中から選び、その番号で答えなさい。



Oh, no! The bus

- ① leaves.
 ② is going to leave.
 ③ was leaving.
 ④ has just left.

(平成21年度東京都都中英研「コミュニケーションテスト」より)

言語の形式からすれば、選択肢①～④は、文法上すべて正しい英文である。しかし、それぞれの英文の意味と示された場面を考えると、正答は④になる。場面を明らかにし、英文の意味をじっくり考えさせ

るように、問題を工夫したい。

(エ)4技能を通しての文法のテスト

これまででは、主に定期テストにおける【言語の知識・理解】という観点からのテストについて考えてみた。しかし、文法はコミュニケーションを支えるものであり4技能を通して文法力を測ることも当然である。

例えば、「あなたは外国人の友だち Mike に旅先から絵のはがきを送ることにしました。自分で旅行先を決め、場所の紹介や旅先での経験などを3文書きなさい」という課題で「書く力」を評価するとき、「文法の正確さ」という観点を設ける。

「話すこと」では、提示された英語の音声を繰り返して発話させることを通して、短時間に正しい文を組み立てる力を測ることができる(平成17年文部科学省「特定の課題に関する調査(話すこと)」より)。この活動では、次のような工夫をすれば、よりコミュニケーション的なものになる。

- ・ 主語を you に替えて繰り返す

テストポイント【現在完了形】

教師: I have been to Kyoto many times.

生徒: You have been to Kyoto many times.

- ・ I know / I don't know を加えて繰り返す

テストポイント【比較】

教師: Koji is the tallest in this class.

生徒: I know Koji is the tallest in this class.

「聞くこと」「読むこと」においても、ターゲットとする文法事項の意味を正しく理解していなければ正答を得られない小問を設けることにより、文法力を測定することができる。

4. おわりに

「語彙」や「文法事項」のテストを、すべてコミュニケーションにすることは難しい。しかし、指導と評価は表裏一体である。コミュニケーションを意識した指導をするならば、テストもよりコミュニケーション的なものにしたいものである。

【参考】

根岸雅史, 東京都中学校英語教育研究会(編著)(2007)『コミュニケーション・テストへの挑戦』三省堂
 東京都中学校英語教育研究会「コミュニケーションテスト」

教師の役割再考

高橋貞雄 Takahashi Sadao
(玉川大学)

社会の変容と共に学校環境も変容する。英語教育の質と量はいつの時代も同じままではない。特に最近では若い教師が増えてきて、英語教育観が従来の教育観とは大きく変わってきているようだとと言われる。当然、学校教育の主役である子どもたちの実態はどうかということも考慮すべき重要な観点である。最近、教師力や授業力といった〇〇力ということばがよく使われている。これをポジティブにとらえればよいのだろうか、それともネガティブなことなのだろうか。よく言えば、力のある先生のクラスや授業の上手な先生のクラスでは子どもたちがよく学ぶし、力もつけるということだろう。逆に、教える力が弱かったり、授業が上手でなかったりする先生のもとでは子どもたちが学ばないということであろう。いずれにせよ、最も重要なのは、生徒が確実な「学び」をするという、生徒の側に立った視点である。先生が立派(そう)な役割を演じていても、生徒の学びがなければ何の意味もない。すなわち、教師がどんなに見栄えのよい役者(actor)であったとしても、生徒が単なる聴衆(audience)や観客(spectator)であったのでは、よい授業にはならないだろう。

ここでは、生徒のよりよい学びを実現するために、教師にはどのような役割があるのか、また、どのような役割を果たしていけばよいのかについて少し考えてみたい。

1 Managing と Teaching

まず、教師には2つの役割があると思われる。それは管理者(manager)としての役割と、教授者(teacher)としての役割である。前者は、一般に教室運営や教室経営(classroom management)を行う役割である。つまり、出席や学習や成績を管理

し、よりよい学習環境を整える役割である。後者は、言うまでもなく、事実や知識や規範などを教授する役割である。これらはどちらが重要ということではなく、双方が依存しあう関係にあると思われる。管理がよく機能していないと、授業も成立しない、といったことはよく見られることである。逆に、よい授業が行われていれば、教室の管理は自然にうまくいくものである。最近よく耳にする「学級崩壊」という現象は何が原因で起こるのか、特定するのは難しい。教師だけでなく、様々な要因が関与しているからである。しかし、教師の管理力や授業力が原因で起こる崩壊もあるだろう。教師には、管理と授業の双方が大事であり、それによって生徒の学びが良好に行われる環境が作られるのである。

2 教授法と教師の役割

今までに、様々な教授法や指導法が開発され実践されてきた。ここでは、そうした教授法をとおして授業の中で教師が果たす役割にはどのようなものがあるのかを考えてみたい。教師が果たす役割を上手にまとめているテキストに、Diane Larsen-Freeman. *Techniques and Principles in Language Teaching*. (OUP, 2000)がある。このテキストで紹介されている教授法では、教師がそこで果たす役割が示されている。右ページの表は、その中から情報を抽出してまとめたものである。

この表を見ると、教師がいかにもいろいろな役割を果たすことを期待されているかが分かる。この他に私が今までに見たものには、KnowerやSupporterなどがある。Knowerというのは「知識を持っている人」のことであるから、Authorityの部類であろう。また、SupporterはAdviserの役割に近い。

Teaching methods	The role of the teacher
The Grammar-Translation Method	Authority
The Direct Method	Director / Partner
The Audio-Lingual Method	Orchestra leader
The Silent Way	Technician / Engineer
Desuggestopedia (暗示式教授法)	Authority
Community Language Learning	Counselor
Total Physical Response	Director
Communicative Language Teaching	Facilitator / Adviser / Co-communicator

こうした役割は、教師が主導して授業を運営する役割と、どちらかという教師は脇役に回り授業の支援を行う役割とに分かれそうである。

ここで、読者の方に以下のような質問をしてみたい。

- ①あなたは授業でどのような役割を果たしていますか？
- ②理想の授業では、教師はどのような役割を果たすべきでしょうか？

おそらく、上記の問いに対して様々な回答があるであろう。中には回答できない、という回答もあるだろう。この問いに対する答えは1つではない。教師が果たすべき役割は、その場その場に応じて変わるものだからである。学校で通常の英語教育が行われている場合には、上で取り上げた教授法を最初から最後まで一貫して行うといったことはめったにない。通常は、50分なりの授業の中で様々な活動を行い、その活動に合わせて相応しい役割を演じるはずである。もし、どの場面でも教師の役割を変えないとしたら、「何とか教授法」の頑固な信奉者か、授業そのものが単調であるかのどちらかであるだろう。いずれにせよ、授業を行うときに自分がどのような役割で生徒に向かっているか、その授業の目的にあった役割を果たしているかについて、一度考えてみていただきたいと思う。

3 教師中心と生徒中心の考え方でよいのか

上の一覧の例でも分かるように、これまでに様々な教授法が提案され実践されてきた。歴史的に言えば、教師中心の教授法から生徒中心の教授法へと振り子が振れてきている。授業は子どもたちのためにあり、学ぶのは子どもたちであるから、この流れは当然のことである。しかし、すでに述べたように、すべての活動を教師中心で行うとか、すべての活動を生徒中心で行う、といったことは好ましい授業のスタイルではない。授業は教師と生徒が協力して作

り上げるものであるから、教師・生徒中心 (teacher-student centered) の授業を構築すべきである、という見解も示されている。

最近アウトカム (成果) が重視され、生徒がどのように学んだかではなく、授業の成果として生徒が何ができるようになったかが、今まで以上に問われることになった。つまり授業のよしあしは、生徒の成果でもって判断するということである。だとすると、教師は最初に授業の到達目標を決め、生徒がその到達目標を達成するために、最適な役割を果たさなければならない。そのためには、教師は時には Authority の役割を果たさなければならないし、時には Adviser の役割も果たさなければならない。

4 授業力・教師力のある教師とは？

授業力・教師力については冒頭でも少し言及した。教員研修でもこのことを視野に入れて、様々な研修が行われている。なぜこういった研修を行うかといえば、教師が力をつけることによって、生徒の学習力や“生徒力”により結果がもたらされるということが前提にあるからである。今後、授業力や教師力を測定するために、教師を観点別に評価する試み (自己評価も含めて) が増えていくだろう。例えば、授業中の英語の使用度が何点、文法の説明が何点、などといった評価を重ねて総合点が何点、といった具合である。つまり、授業力を点数で評価しようというわけである。

一方、授業力を観点別に点数で評価することはできないという考え方もある。子どもたちから見れば、よい先生はよい先生なのである。よい先生に恵まれたから、英語が好きになったし、今の自分がいる。こういった大学生の声を私はよく耳にする。その先生は、その場その場に応じて、きっとよい先生の役割を演じることができたのだと思う。



教科書の言語活動に合わせたテストを

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 温故知新 (?)

下の資料をご覧ください。どちらも *NEW CROWN English Series 3* (三省堂) であるが、左 (p.14) は昭和56年度版のまとめと練習、右 (p.15) は現行 (平成18年度) 版の USE IT のページである。

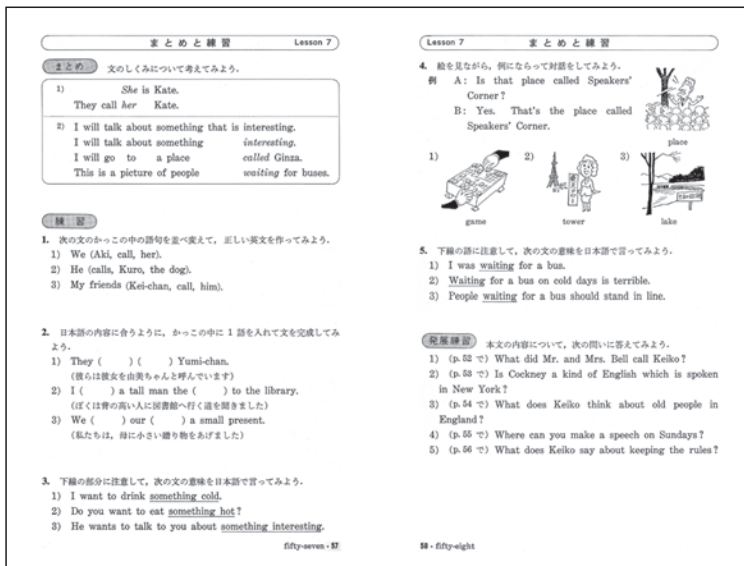
昭和56年度版の教科書は、本文ではアリスやケニアといったトピックを取り上げるなど、内容的にかなり先進的な教科書であったが、今回取り上げたいのは、本文の方ではなく、「練習」と USE IT である。見ていただくと分かるように、昭和56年度版の「練習」は、古色蒼然たる感じがする。並べ換えあり、空所補充あり、英文和訳あり、である。また、発展段階であっても、生徒の言うことは完全にコントロールされ、いわゆる「正解」は1つである。これに対して、現行版は、機械的な練習は本文下の

CHECK IT に任せ、USE IT は現実のコミュニケーションをなるべく反映しようとした、いわゆるオーセンティックなタスクとなっている。具体的に言えば、場面や状況を示す文脈があり、誰が誰に向かって話すのか、何を目的とした発話なのか、などが明確であり、また学習者ごとに表現することが異なる、オープン・エンドなものがほとんどである。

昭和56年度版から30年近くがたち、教科書の判型も大きくなったが、ページ割りもかなり変わっている。基本的なページ割りは、昭和56年度版では3年生で「本文」が5ページ、「練習」が2ページであるのに対して、現行版では「本文」が3ページ、「練習」が5ページ (DO IT や TRY を含む) と逆転している。ここから見えることは、昔は言語活動が教科書には載っていないために、教師があれこれ工夫して教えなければならなかったということである。別の言い方をすれば、言語活動の「しぼり(?)」

がなかったので、自由に教えていたとも言える。これに対して、現行版の方は、具体的な言語活動が載っており、教師はこれに従ってやればそれなりの授業ができるようになっている。ただし、教師の自由度は低く、創造的にやろうと思えば、教科書のできあいの活動を無視するしかない。

さて、昔の教科書の練習問題を見て気づくのは、それが今日の英語のテスト問題に酷似しているということだ。今日のテストが昔の教科書の練習問題を引



きずっていると言える。また、昔は、テストがそのまま教科書の練習問題になっていたとも言えるかもしれない。いずれにしても、昔は、教科書の練習問題とテスト問題の形式が似ていたので、テストでこの種の問題が出て、違和感はなかっただろう。

しかし、この状況を今日の生徒の側から考えてみるとどうだろうか。教科書には、かつてのような「練習問題」はなく、USE ITのような活動がある。となると、授業の中では、顔の見える相手と一生懸命コミュニケーション活動をやっているのである。にもかかわらず、テストとなると、授業中にはやったこともない「並べ換え問題」や「空所補充問題」などが出てくるのである。これらは、英語の教師にとってはおなじみでも、生徒からすると目新しいものである。他にも、これまでに私が調べた中学校の定期試験問題では、9割もの学校で和文英訳問題が出題されているが、現行の検定教科書の中で和文英訳を課している教科書は、おそらく存在しないだろう。

2. 解決の糸口

では、このようなねじれた関係をどう解きほぐしたらいいのだろうか。この答えは、単純に考えれば、教科書が言語活動型となった今、実際に生徒が教室でやっている活動をベースにテストを作るとい

うのが、もっとも整合性があるということになるのではないか。教師は、「英語のテスト」に関する固定概念があるために、テストは旧来のテストの形式を採用してしまう傾向があるが、指導目標との整合性を考えると、最終目標とする言語活動からテストを発想した方がいいだろう。

たとえば、下のUSE IT 4の1に対応するようなテストであれば、次のようなテストが可能となる。「あなたはこれから初対面の留学生に自己紹介をするので、そのためのメモを書いています。『得意なもの (easy)』『苦手なもの (difficult)』『やっていると楽しいもの (fun)』などについて、括弧内の英語を参考にして、英文のメモを書いてみよう。」これであれば、授業でやった活動がどのくらい定着しているのかを見ることができよう。

このような問題では、教室活動同様、「文脈」や「タスクの目的」などをテストの中にも入れることが重要である。上は、書くことのテストの例であるが、他技能のテストも、教室や教科書の言語活動を元に、より整合性のあるテストが可能となるだろう。ただし、現実生活のタスクでは、言語形式に関して絶対的なしぼりはないが、定期試験で、ある言語形式をターゲットにしたい場合は、ある程度の制限を加える必要があるかもしれない。

USE IT 4

1 コンピュータはおもしろい!

例にならって、fun, difficult, easy などを使ってそれぞれの欄についてあなた自身のことを書いてみよう。

It is fun for me to use a computer.

fun

difficult

easy

use a computer

write a letter

swim for one hour

cook tempura

3 幸せなときは?

どんなときに幸せだと感じるか、①-④を参考にしながら例にならってあなたと対話してみよう。該当する人がいたら名前を[]に書いてみよう。また①-④以外の答えが思いついたら書いてみよう。

① Mike: Kenji, what makes you happy?
Kenji: Well, speaking English makes me happy.

speaking English
(Kenji)

sleeping

listening to music

reading books

THINK ABOUT IT

① このレッスンで学んだ単語を3つ書き出してみよう。

② ①で学んだ単語を使って、本文を参考にしながら英文を書いて発表してみよう。

③ People remember Soddako's hope.

SOUNDS

次の文の中で、強く読んだ語を書き出してみよう。それらの語に注意しながら、文を読み込みよう。

The atomic bomb was dropped over Hiroshima.

It shows the terrible power of the bomb.

2 5月は毎月

君は5月を毎月と呼んでいました。ほかの月はどう呼んでいたのでしょうか。1-5の英語を聞いて、例にならって線で結んでみよう。

①	②	③	④	⑤
9月	3月	12月	5月	7月
文月	曲月	赤月	緑月	星月
September	May	March	April	July
thirty-three 33				

SOUNDS

④ thirty-four

本文の読解から 自己表現へ(2)

— 音読指導の工夫 —

立川 研一 Tatsukawa Kenichi (大分県九重町立野上中学校)

1. 音読指導の前の「聞き取り」指導の工夫

本稿では、様々な音読練習のアイデアについて、筆者が行ってきた工夫を述べていく。

本文の読解や音読に先立って、生徒に教科書付属の指導用CDを聞かせることは多いと思う。その際に、ただ漫然とCDを流し、本文を目で追わせるだけでは、学習効果はあまり期待できない。本文を見ることもなく、ただ聞き流すだけの生徒も、中には見られるからである。

私は、どのような学習活動であっても、取り組みの前に何らかの活動の視点を生徒に与えることが大切だと考えている。CDを聞かせる際には次のような指示を出すことが多い。

指示の例	
【教科書を閉じたままでの指示】	
・ 読んでいる人が何回息継ぎをしているか聞き取りなさい。	
・ ○○という単語が何回使われているか聞き取りなさい。(ポイントとなる語)	
・ ○○という単語が出てきたら、さっと手を挙げて、すぐ下ろしなさい。(ポイントとなる語)	
・ この本文の中で一番強調されていると思う単語(表現)を聞き取りなさい。	
【教科書を開いた状態での指示】	
・ 各文で一番強く読まれている単語に印をつけながら聞きなさい。	
・ 読んでいる人が息継ぎをしているところにナメ線(スラッシュ)を入れながら聞きなさい。	
・ (突然CDを止めて)最後に聞こえた単語を指でさしなさい。(集中力が欠けているときなど)	

ポイントは、「英語が得意でない生徒でも、よく聞いていれば答えられる」くらいの視点を与えることである。本文の内容をきちんと理解できなければ答えられないような難しい質問はここでは避ける。

時には「○○さんの夢は何ですか。答えの中心となる単語1語を聞き取りなさい」など、内容に踏み込んだ質問をすることもあるが、ここでの目的はあくまで、生徒の「聞き取り」に対する集中力を促し、あとの読解や音読の活動につなげていくことにある。CDを聞かせたあとには答え合わせをし、苦手な生徒が正解を言えたときには、その努力を讃え、達成感を感じさせるよう心がけている。

2回目以降の聞き取りに際しては、少しずつ与える課題の難易度を上げていく。具体的には、前号で述べたような「具体的な場面の状況」や「登場人物の心情や行動」などについての質問を行い、4人班ごとに聞き取れたことを話し合わせるのである。

また、学習がある程度進んだ段階では、聞き取りの途中でいきなりCDを止め、最後に聞こえた1文をノートに書き取らせることもある。その際も、いったん個人で書き取らせたあと、4人班で協力して文章を正確に再現させるようにしている。生徒は、互いの書いた文章の冠詞や動詞の語尾など、細かい部分にまで注意を払うようになる。

毎回の授業でこれらの指導を全て行うことはできないが、本文の難易度や特徴に合わせて取り入れ、時には前時の復習として行ったりもしている。

2. 様々な音読活動

家庭学習で授業内容を振り返ることができるようにするため、授業時間中に全ての生徒が本文を理解し、音読できるようにさせたいものである。そのために、私は様々な方法を用い、授業中最低10回以上は本文の音読をさせ、内容を考えさせるようにし

ている。「〇回読んだら座りなさい」のように、同じ方法で数回読ませて終わるのではなく、練習方法に変化を加えながら生徒が積極的に練習に取り組めるように心がけている。以下に、私が授業に取り入れてきた音読指導の工夫のいくつかを述べる。

(1)「チャンク読み」と「同時通訳読み」

音読の1回目は、意味の固まり(チャンク)ごとに切りながら範読し、リピートさせ、本文にナナメ線(スラッシュ)を入れさせる。2回目は、単語の発音とスラッシュの位置を確認させるために再度リピートさせ、3回目は、ペアごとに互いの発音を聞き合わせながら読ませて、全ての単語の読み方を確認させる。

さらに、チャンクごとに教師が日本語を言い、生徒にはその部分にあたる英語を言わせたり、逆に教師がチャンクごとの英文を言い、生徒がその部分の日本語を言う「同時通訳読み」をさせたりする。

ただし、教科書だけを見ながらこれら全ての活動を行うことは、よほど英語が得意な生徒でない限り、難しい。必要に応じ生徒の状況に合わせた補助プリントを用い、ペアでも練習に取り組ませている。

【補助プリント例】

Welcome / to my page. Last week / we visited /
ようこそ / [] / [] / 私たちは訪れた /

Mr Sato, / a volunteer teacher. We made / *washi*, /
佐藤さんを / ボランティアの先生 / 私達は [] / 和紙を /

Japanese paper, / with him. Washi needs / clean water.
日本の紙 / [] / 和紙は必要とする / [] を

(平成18年度版 NEW CROWN BOOK 2, p.12)

(2) 音読のスピードを変えさせる

すらすらと英文をなめらかに読ませるだけではなく、私は単語や文章の終わりの子音も、生徒にしっかりと発音させるようにしている。語尾の子音までしっかり出すための練習として、スピードを思いきって落とした音読練習も行う。

OLYMPUSのICレコーダー、Voice Trekを使えば、音程を下げないで音声のスピードを落とすことができる。また、多くのパソコンに標準装備され

ているWindows Media Playerを使えば、CDの再生速度を簡単に変えることができる。これらを利用してゆっくりとした英文を聞かせると、ネイティブスピーカーが子音をしっかりと発音していることがはっきりと聞き取れる。生徒に子音の重要性を実感させるために、非常に有益である。

逆に、思いきりスピードを上げて読ませることもある。速く読めることだけが必ずしもよいことではないだろうが、速い英文を聞き取る力をつけるためにも、速読の練習は大切であると考え。大きく息を吸って一息でどこまで読めるか競争したり、ストップウォッチを用いて早読み競争をしたりと、生徒のチャレンジ精神を喚起するように工夫している。

どんな長い本文でも教師は必ず一息で読める、ということを生徒に実際に見せて威張ってみせると、生徒は燃える。(もちろん前もって教師の音読練習は欠かせないが…)

(3) Read & Look Up, Overlapping, and Shadowing

自然なスピードや発音、イントネーションに慣れさせるためにも、再びCDを用いて、CDと同じように読ませる練習を行う。

CDを聞いているときは本文を見てよいが、読むときは顔を上げさせるRead & Look Up、本文を見ながらCDと同じスピード、同じイントネーションで読ませるOverlapping、また、本文を見ないでCDから聞こえた英文をCDと同じように繰り返させるShadowingなどを、適宜取り入れて練習に取り組ませている。

(4) 二人称読み、三人称読み

主語がI (we) である一人称主語の本文の場合、ペアで以下のような発展的な音読練習に取り組ませている。1人は教科書を見ながら1文ずつ本文を音読するだけだが、パートナーは、教科書を見ずに、相手の言った英文の主語をyouに替えて文全体を繰り返すのである。具体的には以下のような会話になり、ちょうど相手の言った文の主語をyouに替えて相づちを打っているような形になる。(下線部

は B が替えなければならない部分を示す。A は B の言ったことが正しければ “Yes” と行って、次の文に進む。)

【実際の練習例】

A: We have many languages in India.

B: You have many languages in India.

A: Yes. I use three of them.

B: You use three of them.

A: Yes. ...

(中略)

A: Yes. I like using all of my languages.

B: You like using all of your languages.

(以下略)

(平成 18 年度版 NEW CROWN BOOK 2, p.53)

また、この練習のさらなる発展形として、B が、主語を三人称 (he / she / they) にして文全体を言い換えることもある。主語を替えることに伴い、代名詞や動詞の語尾を適切に変化させなければならず、その際の意味の変化も同時に頭に浮かべなければならぬので、かなり難易度の高い練習となる。本文全体を用いて練習させるのは難しいかもしれないが、会話の一部を抜き出して取り組ませたり、前学年の教科書の会話文を用いて行うだけでもかなりよい文型練習となる。

(5) 状況設定劇場

会話形式の本文の場合は、登場人物の性格付けをしたり、会話が行われている場所や状況を設定したりすることで、読み方を工夫させる音読練習もよく行う。例えば、以下のような本文に対して、あのような指示を出してペアで音読練習させるのである。

Ming: Excuse me. Where is the toilet?

Clerk: It's near the shop. Under the stairs.
Over there.

Ming: I see. Thank you.

Clerk: You are welcome.

(平成 18 年度版 NEW CROWN BOOK 1, p.42)

指示

実は今、Ming は切羽詰まった状態で、大急ぎでトイレに行きたいのです。Ming はできる限り早口で話さない。店員さんはゆっくりと優しく丁寧に場所を教えてあげてください。

この活動を私のクラスでは「状況設定劇場」と呼ぶ。生徒は意欲的に、工夫して様々な読み方をする。音読の声が大きくなること請け合いである。

同じ本文でも異なる状況を設定することで、読み方が全く変わる場合もある。教室での会話の場面を、「騒がしい昼休みの体育館」や「静かな雰囲気の高級レストラン」での会話に変えたり、「帰りの電車の時間に間に合うように大急ぎで歩きながら」の会話に変えたりすることで、大きい声になったり小さい声になったり、また早口になったり遅くなったりと、様々な読み方に変わっていく。

私の生徒たちが一番燃えて大きな声を出す「状況設定」の指示は以下の 2 つである。どこの本文でも使えるので、一度ぜひお試しください。

指示

- ・ 2 人は実はお年寄りで、お互いの言うことがときどき聞こえないときがあります。聞こえないときは相手に “Pardon?” を使って聞き返してください。“Pardon?” は何回使ってもかまいません。
- ・ 2 人は警察官の上官と部下です。部下である Bさんは、全ての台詞の最後に “~, Sir.” をつけて元気よく話してください。

教室中 “PARDON?” や “SIR!” の大合唱になる。

③ おわりに

本稿ではこれまでに私が学び、実践してきた教科書本文の音読練習についての工夫を述べてきた。今回は教科書本文を利用したライティングやスピーキング活動など、自己表現活動についての工夫やアイデアを述べる。

Just Now

I はじめに

筆者が住んでいる小諸市の英語活動の指導を引き受けてから3年になります。市内には小学校が6校あり、ALTが3名採用されています。したがって、各校とも隔週でALTとのT-Tを実施することができます。英語活動は1年生から導入されており、高学年は、3年前から年間35時間を目標としています。途中交替したALTもありますが、これまでのところALTは全員評判がよいようです。年に2回、いずれかの小学校が公開授業を行っています。英語活動の条件が整っていると言えます。

筆者の勤務先の大学がある長野市の英語活動の指導も引き受けています。長野市は、小諸市とは対照的に、英語活動の条件が未整備で、市内に小学校が55校あるにもかかわらずALTは1～2名しか配当されていません。各学級がALTと触れ合うことのできる機会は、年に1回程度です。

長野市は、今年度から新学習指導要領の「外国語活動」を前倒しで年間35時間実施しています。長野市教育委員会は、市内の小学校を7つのグループに分け、市内にある2つの大学（信州大学と清泉女学院大学）に地区を分担して指導を依頼しています。長野市の小学校は、HRTがほぼ毎時間単独で「外国語活動」を担当しています。

II 基本的な指導方針

小諸市においても、長野市においても、「外国語活動」の担当者には、指導に際して、下記の点を理解していただいています。

(1) 小学校では、子どもたちが英語を聞いて、おおよその内容を理解できるようになることを目標

長野県の小学校英語の状況

—長野市、小諸市と佐久市浅科での指導を通して—

渡邊時夫 Watanabe Tokio
(清泉女学院大学)

とする。

- (2) そのためには、英語のインプットをできるだけたくさん与えるように工夫すること。また、子どもたちには話すことを強制しない。
- (3) 「理解できるインプット」を与えるために、HRTとALTを対象にMERRIER Approach（メリアー・アプローチ）の考え方を紹介し、実践していただいている。
MERRIERとは、Mime, Example, Redundancy, Repetition, Interaction, Expansion, Rewardのイニシャルを取って命名したもので、子どもたちに英語で話す場合の留意点（コツ）を述べたものです。できるだけジェスチャーや表情を豊かに話す（M）、抽象的すぎると思ったら、例を挙げたり、エピソードを話すなど、できるだけ具体的に話す（E）、同じ内容を理解させるのに、発想を変えて話す（R）、大切だと思う単語や文や内容は繰り返し話す（R）、先生だけが続けて話すことを避け、子どもたちとことばを交換しながら話す（ただし、子どもたちに負担のかかるような返答を求めない）（I）、子どもたちが不完全な英語で話した場合も、暖かく受け入れた上で正しく言い換えたり、付け加えたりする（E）、常に励ましの言葉を忘れない（R）という考え方です。（MERRIER Approachについて詳しくは三省堂のホームページで「小学校英語活動コラム」をご覧ください。）
- (4) 「考えさせる」ことを重視し、英文を機械的に復誦させたり、暗記させたりすることはできるだけ避ける。
- (5) HRTは、英語のリズムを身に付け、子どもたちへの指示を英語で言えるように努める。
- (6) 長野市では、できるだけ『英語ノート』に加え、他の音源を活用し、インプット不足を補う。

Ⅲ アンケート調査とその結果

ALTがある程度配置されているか否かにより、「外国語活動」に対する先生の意識や評価が異なるだろう、ということは容易に推測できます。そこで、小諸市3校および佐久市浅科小学校（今年3月までの2年間のいわゆる「中核校」）。ALTが豊かに配置され、筆者が指導）と長野市3校（筆者が指導）にお願いし、アンケート調査を行いました。小諸市・浅科小および長野市とも、高学年担当者のすべて（前者32名、後者30名）を対象とし、すべての担当者から回答を得ました。主な項目について、アンケートの結果と考察をしたいと思えます。

(1) 小諸・浅科と長野が大きく違う点

(a) 英語で指示を出すこと

	小諸・浅科	長野
慣れてきたように思う	20.0%	3.2%
以前よりは抵抗がなくなった	56.7%	58.1%
大変抵抗があり、なかなか使えない	23.3%	38.7%

英語を使うことに慣れてきたと認識している先生の割合は、ALTと頻繁に接している小諸・浅科の方がはるかに大きいです。長野の先生の1/3以上は、英語が使えず苦勞している姿が読み取れます。しかし、どちらのグループも、次第に英語を使うことに抵抗がなくなってきていることは、将来に希望が持てるように思えます。

(b) 小中の連携についての評価

	小諸・浅科	長野
始まったと感じている	32.0%	11.5%
始まったとは感じていない	68.0%	88.5%

ALTの配置を重視している地域は、必然的に小中の連携にも努力している傾向があり、そのことが小学校の先生の意識に表れているように読み取れます。

(c) 研修を受けたいことは何か（複数選択可）

小諸・浅科 ()内の数字は人数	長野 ()内の数字は人数
多様なゲーム (18)	多様なゲーム (20)
英語の指示 (16)	英語の指示 (19)

いわゆる英語の会話力(16)	いわゆる英語の会話力(19)
ALTとのT-Tのあり方(14)	英語の正しいリズム (13)
ことばや文化の指導 (14)	『英語ノート』以外の教材(12)
『英語ノート』以外の教材(11)	『英語ノート』の活用法(12)
『英語ノート』の活用法(10)	ALTとのT-Tのあり方 (9)
他校の実践について (10)	ことばや文化の指導 (9)
小中の連携 (8)	英語の歌の指導 (9)
母音や子音の正しい発音 (7)	母音や子音の正しい発音 (7)
英語の正しいリズム (7)	他校の優れた実践について (4)

単独で教えることの多い長野市の先生は、小諸・浅科の先生よりも「英語のリズム」に不安を持っていることが分かります。また、ALTとのT-Tについて比較関心が薄いようです。これは、実現性が少ないからでしょう。その分、「英語の歌の指導」に関心が向いているようです。小諸・浅科の先生方がALTとのT-Tで悩んでいることも分かります。ALTとのT-Tについて聞いたところ、30名中19名が「自分がアシスタントになっている」と回答しています。

(2) 小諸・浅科と長野の傾向が類似している点

(a) 『英語ノート』だけでは満足せず、それ以外の教材を求めている先生が少なくありません。

(b) 「外国語活動」の導入について、「英語教育の将来に効果がある」と回答した先生は、小諸・浅科で85.0%、長野で90.0%と、双方とも肯定的です。ただし、「改善すべき点が多い」と考えている先生が、両地域とも、50%前後です。

Ⅳ おわりに

ALTや英語が堪能な日本人とのT-Tが望ましいと思いますが、アンケート結果によると、HRTには、「ALTにおまかせ」という姿勢があると認められます。小諸のALTには、「HRTに英語を使う機会を工夫してつくるのもあなたの役割」と指導しています。この指導に忠実なALTの勤務校のHRTは、英語の使用に自信を増している事実も分かりました。しかし、ALTに恵まれていない先生でも、英語を使う必要性がプラスに働いて、かえって英語の使用能力が目覚ましく向上しているケースもあります。最も大切なことは、努力ということかもしれません。

The “True” Meaning of “Auld Lang Syne (蛍の光)”

Robin Sakamoto

(Rikkyo University)

Welcoming in the New Year

At midnight on New Year’s Eve, it is a common custom in the US to link arms with friends and start to sing “Auld Lang Syne.” I say start to sing, because although everyone recognizes the tune, the words are known by few. In fact, to write this essay, I had to look them up myself. They are:

Should old acquaintance be forgot,
And never brought to mind?
Should old acquaintance be forgot,
And old lang syne?

When I read these words, I can hear the tune in my head and feel the memories of sharing good times with friends. It is a very powerful song known all over the world.

In fact, “Auld Lang Syne” was originally written in 1788 as a Scottish poem and set to a traditional folk song. It became a tradition to sing on New Year’s Eve in Scotland and later spread to most English speaking countries.

I have no idea how the song came to Japan but I do remember how shocked I was the first time I heard it here. It seemed so out of place to me. I was standing in a freezing cold gymnasium watching my first group of junior high school students graduate. Suddenly I heard a familiar tune but the words had changed to Japanese lyrics about the lights of fireflies. There certainly were no fireflies around that March, and I couldn’t understand why the students were singing a New Year’s song. But somehow over the years that I have taught in Japan, the old Scottish poem now seems to me to truly belong to Japanese graduation ceremonies.

Graduation American Style

In the US, compulsory education is until one’s 16th birthday. So this means that all students move on from junior high school to high school as they are not yet 16. Also, as we don’t have entrance exams for high school, most everyone continues with the

same classmates. Often to save money for sports facilities, such as football or baseball fields, junior and senior high schools are located very close to one another and sometimes even in the same building.

A graduation ceremony from junior high school is not so popular. I remember my first graduation ceremony was when I finished high school. Many people have seen movies of students throwing their special hats in the air for graduation. But between junior and senior high school we don’t really celebrate so much.

Graduation Japanese Style

How surprised I was at what a beautiful and formal ceremony we had for our junior high school graduation in Japan! And what I also learned at that time was that many students didn’t know yet which high school they would attend the following month. So for the students it really was a time to say goodbye to the only life they have known so far and even more to the friends who shared it with them.

When I look at the old Scottish poem, it sounds like the original author might have been feeling something like that. The words auld lang syne mean something like “long, long ago” and so the poet is asking if he will remember his friends of long, long ago. The tune makes me think he hopes he will but he isn’t exactly sure.

Now whenever I hear that song, I think of junior high school students unsure of their future, yet celebrating in song the hope that they will keep their friendships for a lifetime. When next they meet their junior high school friends of “long, long ago”, I hope they will share many happy memories together. Maybe it will even be in the summer under the lights of the fireflies. Wishing you all a blessed New Year and congratulations to the graduating class of 2010!

英語で言いたかったけれど 言えなかった表現を探る

— EasyKWIC 2を活用しよう！ —

日臺滋之 Hidai Shigeyuki
(玉川大学)

1. 日々の授業実践から

筆者は昨年まで中学校に勤務しており、週明けの授業では、週末のことを話題に2人1組になって対話する活動を継続的に行ってきた。部活動に参加している生徒は、きまって週末の対外試合を話題にする。こんな具合である。

A: How was the weekend, Ken?

B: It was a lot of fun. We played a baseball game with Kita Junior High School. We ... (「試合に負けた」はなんて言うんだっけ, loseの過去形のlostだったかな) We lost the game. (2対0で負けたってなんて言うんだっけ)

* ()内は生徒のつぶやきである。

筆者はこのような対話活動のあとには、紙を配り、英語で言いたかったけれど言えなかった表現を日本語で書いてもらい、回収してきた。その後、ALTと、休み時間を活用しながら、英語に直す作業を行ってきた。生徒が知りたい日本語表現と、それに対応する英語表現を1対1であたえ、エクセルを使ってコーパスを作成してきた(参考1)。学習者も便利に活用できるよう、この日英パラレルコーパスのデータを、上田博人先生のご好意で、非常に簡単に検索できるフリーウェア EasyKWIC (参考2) に載せていただいた。本稿では EasyKWIC 2 が学習ツールとしてすぐれていることを紹介したい。

2. EasyKWIC 2のすぐれた特徴

- ・ 例文が全て生徒からの表現や語彙についての質問であり、総数が1,000件以上を超えている。
- ・ 生徒からの質問は繰り返し載せているので、生徒は、どこでつまずきやすいかを知ることができる。
- ・ 検索が容易で中学生が手軽に検索できる。

3. 生徒の反応と今後のこと

中学3年生を対象にコンピュータ室で EasyKWIC 2 を使用し、英文日記の課題に取り組み、使ってみた感想を聞いたところ、大変よい12%、よい50%、どちらともいえない28%、あまりよくない8%、よくない2%であり、過半数は好意的な反応であった。

授業で、文法の導入とその練習に多くの時間を割いてはいるが、実際にコミュニケーション活動を行うと、学習者は、言いたい表現を知らないためにつまずきを感じていることが多い。中学生のつまずき表現にフォーカスしたワーク類(参考3)もあるが、さらなる EasyKWIC の活用を提案したい。

参考(参考文献・参考Webサイト)

1. 日臺滋之(2009)『中学 英語辞書の使い方ハンドブック』明治図書出版
2. 上田博人「簡単な検索プログラム: EasyKWIC」
<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/gengo/easykwic/index.html>
3. 日臺滋之, 太田洋(2009)『1日10分で英語力をアップする! コーパスワーク 56』明治図書出版

「～対…」を日本語で検索し、英語表現を表示した結果(下図)

English	日本語 対
The Tigers won the game by 1 to 0.	野球のスコア1 *対0でタイガースが勝った。
We lost the game to Higashi J.H.S. by 3 to 1.	東中学校にその試合は3 *対1で負けてしまった。

NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition (平成 22 年度用)

修正箇所のお知らせ

平成 22 年度用の教科書から以下の箇所を修正いたします。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

Book 2

ページ	行	原文	修正後
62	図版 キャプション	(首都大学東京 三上岳彦教授提供)	(帝京大学 三上岳彦教授提供)
63	図版 キャプション	(首都大学東京 三上岳彦教授提供)	(帝京大学 三上岳彦教授提供)
100	中段 51 行	*someone [sʌmwan] (代) だれか, 72	*someone [sʌmwan] (代) だれか, ①

好評発売中

自己表現力をつける英語の授業

斎藤栄二 著 2,100 円 (税込)
四六判 192 頁 ISBN 978-4-385-36353-0



自己表現の語彙の増やし方、質問の作成能力のつけ方、Discussion の仕方、Read and Look up の仕方など、実践を踏まえてやさしく具体的な手順を示す。好評の前著『基礎学力をつける英語の授業』の続編。

中学校・高校 英語
段階的スピーキング活動 42

ELEC 同友会英語教育学会
実践研究部会 編著 2,415 円 (税込)
B5 版 208 頁 ISBN 978-4-385-36355-4



「インタビュー活動」「スピーチ」「チャット」「レポート」「ディベート」など、スピーキング活動についての指導技術や 42 の事例を紹介。既習の知識を活用して「話す」力を育む指導に!

TEACHING
ENGLISH
NOW

17 号

2010 年
1 月 15 日発行
定価 80 円
(本体 76 円)

編集・発行人：八幡統厚
発行所：株式会社三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14
電話 (03) 3230-9422 (編集)
振替 東京 00160-5-54300
[NEW CROWN ホームページ]
<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html>
印刷：三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9
電話 (0426) 45-6111 (代)

編集後記

三省堂は、Web「三省堂英語教科書・教材 SANSEIDO ENGLISH」(URL <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>) にて、今後も、授業をサポートする資料(年間指導計画表、ワークシートなど)や英語教育に関する情報(コラム、研究会情報など)を掲載していきます。

NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1 2 3

基礎力をつける生徒用教材 [学校採用品] の紹介

ジョイフル リーディング Step1・Step2

B5判

STEP1 40ページ 学校納入定価400円(本体381円+税)

STEP2 40ページ 学校納入定価400円(本体381円+税)

- ◆楽しく読んで読む力を伸ばせる、多彩な読み物教材を収録。
- ◆STEP 1 は2年前半まで、STEP 2 は3年までの文型・文法事項を目安に。



リスニング CD 1 2 3

各学年 テキスト (B6判 56~72ページ) 付き

1年 12cm CD1枚 学校納入定価2,100円(本体2,000円+税)

2年 12cm CD1枚 学校納入定価2,100円(本体2,000円+税)

3年 12cm CD1枚 学校納入定価2,100円(本体2,000円+税)

- ◆教科書本文を標準的米音 (一部英音) で表情豊かに録音。
- ◆新出単語の読み、本文通し読みを教科書配列順に収録。
- ◆CD用のトラックナンバーをテキストに掲載。



ペンマンシップ

B5判 横開き 2色刷

40ページ

学校納入定価 280円(本体 267円+税)

- ◆書き方を系統的に練習できる英字練習帳。
- ◆2色刷で、書き方に関する説明と記号の用法など、英文字に関して知っておくべき事柄を解説。



補習ノート 1 2 3

B5判 (別冊解答付き)

1年 88ページ 学校納入定価 200円 (本体 190円+税)

2年 88ページ 学校納入定価 200円 (本体 190円+税)

3年 88ページ 学校納入定価 200円 (本体 190円+税)

- ◆英語の習得が比較的遅い生徒を対象とし、基礎・基本の定着を図る。
- ◆教科書の基本文を中心に、「読む」「書く」作業を通して英語の文に慣れることに主眼をおいた練習帳。
- ◆1項目につき見開き2ページで構成。



聞く活動重視の新しいテキスト

準拠教材

KIDS CROWN

小学校外国語活動用

KIDS CROWN
英語絵カード



(スタンダードコース/アドバンスコース)
トランプサイズカード (タテ 90mm×ヨコ 62mm)
各 160 枚
定価 各 1,200 円 (本体 1,143 円+税)

KIDS CROWN 編集委員会 [渡邊時夫(代表) 久埜百合ほか] 編

楽しく英語に親しむ/確かな力をつける/安心して指導できる

プライマリーコース

スタンダードコース

アドバンスコース



■指導用セット
ーセット内容ー
ビデオ (VHS 1本)
ウォールチャート
(B全判 10枚)
CD (1枚)
教師用指導書
(B5判 112頁)

低学年用

定価 18,900 円
(本体 18,000 円+税)



はじめて使う
テキスト

■テキスト
B5判 72頁
定価 500 円
(本体 476 円+税)
■教師用指導書
B5判 112頁
CD (3枚)
ウォールチャート
(B全判 10チャート)
定価 7,000 円
(本体 6,667 円+税)



スタンダードに
続くテキスト

■テキスト
B5判 80頁
定価 550 円
(本体 524 円+税)
■教師用指導書
B5判 136頁
CD (4枚)
ウォールチャート
(B全判 14チャート)
定価 8,000 円
(本体 7,619 円+税)

小学校英語 学級担任のための活動アイデア集 3・4年生用 / 5・6年生用



斎藤栄二・竹内理 [編著]

B5判
3・4年生用 152頁
5・6年生用 160頁
定価 各 2,100 円
(本体 2,000 円+税)

現場の実践から出た小学校生向けの活動アイデア集。ワークシートなどを使って楽しく取り組める活動を紹介。授業後に学んだことのまとめができる「ふりかえりシート」付き。

小学校英語で身につく コミュニケーション能力



湯川笑子・高梨庸雄・
小山哲春 [著]

A5判
212頁

定価 2,625 円
(本体 2,500 円+税)

小学校英語で児童が身につけた「コミュニケーション能力」とは？ 児童・教師を対象にした調査を通してこれまでの成果を検証し、今後の展開の可能性を探る。リスニングテスト DVD 付き。

三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□本社 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)
□大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地 2-5-3 TEL. 06 (6341) 2177
□名古屋支社 〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F TEL. 052 (252) 9211・9212
□九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL. 092 (531) 1531・1532
□札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 2F TEL. 011 (616) 8722